＜＜東北魂＞＞を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有
〒 190-0013
東京都立川市富士見町 2-12-13　安藤ビルB１F
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU !

無料
第 8 号
毎月発行
創刊 2013 年（平成 25 年）1 月 16 日　水曜日
2013 年（平成 25 年）1 月 16 日　水曜日

「埋もれた東北文化を掘り起こす旅」その②

「日本刀から東北の歴史を考える・・・中鉢美術館からの問題提起」

中鉢美術館訪問

前号から開始した「埋もれた東北文化を掘り起こす旅」の第二回目は、宮城・岩出山の日本刀美術館の「中鉢美術館」訪問である。館長である中鉢弘氏のご先祖は岩出山伊達家の家臣であり、それもあって中鉢氏にはどことなく誇り高き武士の印象があるが、この美術館からは、東北の歴史と文化について、いくつかの大きな問題提起がなされている。その内容は驚くべきものであった。

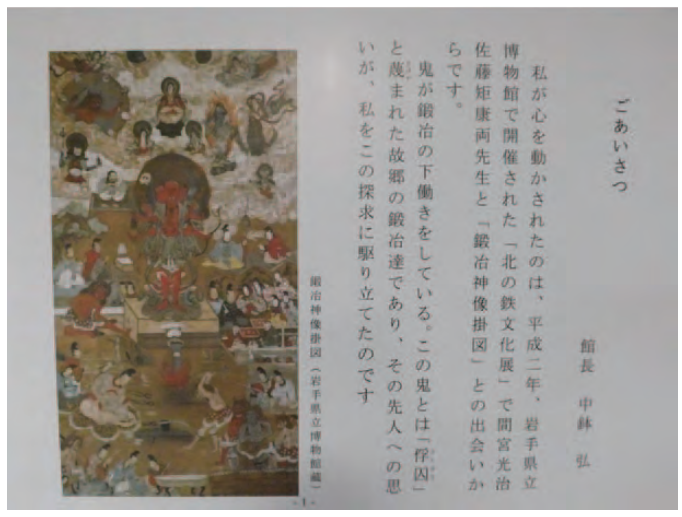
◇

この美術館は大崎市岩出山にあり、陸羽東線の有備館駅を降りてすぐの場所にある。有備館駅までは、仙台から東北本線で小牛田まで行き、そこで陸羽東線に乗り換え一時間ほどのところにある。または東北新幹線古川駅で乗り換えて二〇分ほどの距離である。

駅名にもなっている有備館は、伊達藩の藩校であり、かつ日本最古の学問所建築で、寛永九年（一六三三年）に建設されたものである。

この有名な有備館にも負けず劣らず有名なのが中鉢美術館で、日本刀に興味ある方なら知る人ぞ知る、かなり有名な美術館である。またその名は国内だけでなく、海外にも行き渡っており、つい先ごろも海外の研究者や高官が訪れている。

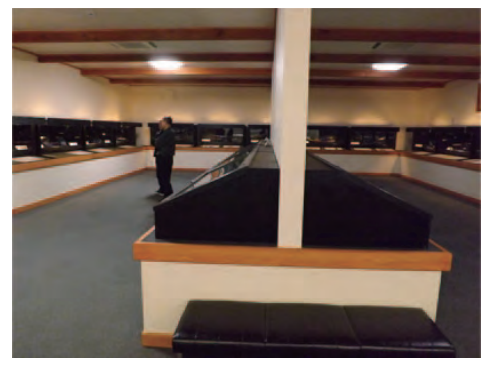
この美術館は、官の支援とは無縁のまったくの個人経営であるということ、それから何よりも、今回の主役でもある日本刀のルーツである「舞草刀（もうくさとう）」の在銘最古の刀である『閑寂（ふさちか）』を保有し、展示しているということである。



美術館設立の動機となった
鍛冶神像掛図とその説明

中鉢美術館　館長　中鉢弘氏

入り口



展示室

建設に至った動機

この美術館建設についてのエピソードも興味深い。

ひとつは、官の支援なしに建設したこと。地元の建設業者が利益度外視で建設に協力してくれたこと。

そして何よりも、平成二年に岩手県立博物館で開催された「北の鉄文化展」で見た「鍛冶神像掛図」（左上写真）と出会ったことだという。

この絵には、鍛冶の下働きをしている鬼が描かれている。この鬼とは、かつてこの地域一体で働いていた鍛冶たちであり、故郷を離れることを余儀なくされ、「俘囚（ふしゅう）」（注参照）と蔑まれた人たちである。中鉢氏も、よりにもよって鬼として描くとは何事かと憤慨されたことであろう。人並みの扱いをされなかった鍛冶たちの境遇に、時代は異なるが、「同郷人」として、「東北人」として居たたまれない気持ちになられたのであろう。そうした心情が中鉢氏を美術館の建設と一連の探求に駆り立てていったという。

中鉢氏によれば、桃太郎伝説に登場する鬼が島の鬼も、過酷な環境に耐えかねた俘囚ではないかと思われるということである。

◇

注）古代東北地方の蝦夷（えみし）で、律令国家に征服されて日本各地に集団的に配置されたものをいう。

東北の歴史・文化への問題提起

今回の記事では、日本刀のルーツに関していくつかの重要な真実を広く知らせるとともに、そこから派生する東北の歴史と文化に関する問題提起を行う。

しかしその問題提起は、あまりにもこれまでの「常識」と異なるもので、大いに驚かれる読者もいるかもしれないが、どうぞ最後までお付合いいただきたい。

同時に、それは東北にとっても、東北人にとっても非常に重要なことであり、それを理解しているのとそうでないのとでは、「東北人」の今後の生き方にも、東北の復興や東北の未来にも大きな差が出てくるはずである。

また、このような問題提起はおそらく連鎖的にどんどん拡大していくことだろう。今回は、その第一回目という位置づけになる。

問題提起その①…日本刀の源流は東北にあり

まずは、最初の重要事実と問題提起である。

当紙面左下の図を見ていただきたい。これは、日本刀の変遷を系統立てて並べた図である。一番下にある「太刀」は誰でも知っている日本刀である。しかし、上の「蕨手刀（わらびてとう）」や「毛抜形蕨手刀（けぬきがたわらびてとう）」を知る人は少ない。しかも、この両者が日本刀の源流、日本刀の元の元といったら、きっと多くの方が驚かれるだろう。

この日本刀の源流に関する論争は、大正時代からすでにあったが、平成九年の東京国立博物館の見解によって終止符が打たれ、この日本刀の系図が確定したと言える。

これは何を意味するか。日本刀の原型は、大和朝廷が作ったものでもなく、出雲等の西日本でつくられたものでもなく、さらに、朝鮮半島や中国からの渡来品でもなく、まさに東北、奥州で作られたということである。純正の東北産ということである。

東北産の刀剣類は湾曲している。対するに、「湾刀」が大和朝廷側に、東北から「伝播」されるまでの刀は「直刀」であった。

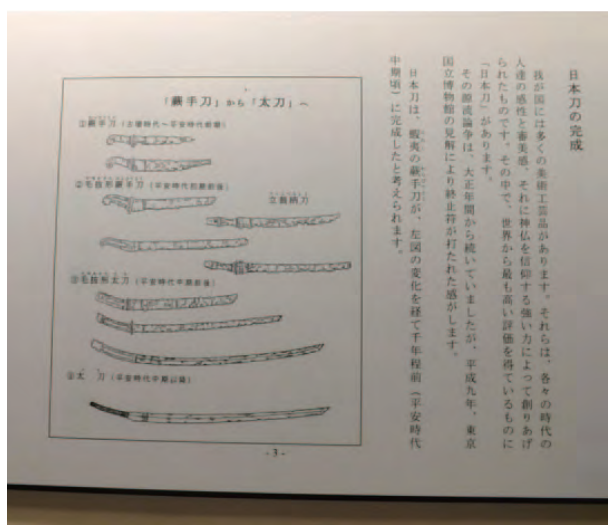
じつに、古代から江戸時代まで、武士の命そのものともいわれ、精神文化の象徴であった日本刀のルーツが東北にあったということである。

そして、問題提起とは、日本刀の源流が東北にあったことに関連する諸々の事柄の総点検を、ぜひとも東北人の手でなすべきであるということである。単に、日本刀の源流論争の決着で終わってはならないということである。ここを起点とし、突破口として、長らく封印されてきた東北の歴史と文化の再興に挑戦すべきだということである。

三つの奥州古鍛冶集団

では草創期の日本刀は奥州のどこで作られていたか。実は一箇所ではない。大きく分けると三つの鍛冶集団があり、それぞれの使命を担っていたという。（次頁左下図）

ひとつは、「舞草鍛冶」である。岩手県の一関市や平泉周辺を中心にして、安倍氏や平泉の需要に応じていた集団であり、奥州鍛冶



日本刀の完成まで

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

の中心的な存在であった。

二つ目は、「月山鍛冶」。出羽三山や山岳信仰を中心にして、諸国を往来した鍛冶集団で、室町時代には山形県寒河江周辺を拠点にしていた。

三つ目は、「玉造鍛冶」。宮城県玉造郡周辺を中心にしていた。その立地条件から、三つの集団の中では最も早く律令政権下に組み入れられたらしい。

ちなみに、この玉造という地名は出雲や河内などにもあり、いずれも古鍛冶が居たところである。

さらに、神代から鎌倉時代末期までの歴代ベスト四二工が記されている刀剣古書の『観智院本』（重要文化財）には、これらの鍛冶集団から八名が選ばれている。しかも、この八人にとどまらず、奥州鍛冶ではないかと思われる刀工、元々は奥州鍛冶と思われる刀工、さらには奥州鍛冶に縁があると思われる刀工まで含めると四二工中、軽く半数を超えるという。

問題提起その②…東北の技術の伝統

このことから言えるのは、日本刀の刀工の大半が、奥州鍛冶に何らかの縁があるものであり、彼らが日本刀文化を育み、支え続けたということである。

なかでも、名刀ということで誰でもその名を聞いたことがある「備前長船」の備前国（岡山県）。ここの草創期の「古備前」にはまちがいなく奥州鍛冶の子孫がいたという。

これらの事実は、東北や東北人にとって、まことに誇らしいことである。オリジナリティーあふれる精神で、逆境にもめげず、粘り強く長い時間をかけて日本刀を作り出した。それは国内にも、海外にも、どこにもないものであった。手本がまったくないところから、自らの創意工夫によって、蕨手刀から日本刀に仕上げていった。これはすごいことである。独創力のすごさである。

この東北で生まれた日本刀は中国にも「輸出」されていることが確認されている。当時の最先端国家であった中国にも、このすばらしい日本刀の名が知れ渡っていたのだ。いわば国際的にも図抜けていたのだ。

そしてこの伝統を、俘囚と蔑まれても、たとえどのような過酷な境遇に置かれても、地道に、まじめに引き継いで行ったのだ。その伝統の水脈は間違いなく、現代の「東北人」にも流れているはずだし、いまも「東北人」のなかに生きていると確信する。

そして、これからの東北復興に、この「古代の同郷人」の精神が必ずや活かされていくことと思う。是が非でも、先達の心意気を思い起こし、引き継いでいくべきである。

問題提起その③…北の鉄文化伝来

多くの日本人は、古代日本の鉄文化は、朝鮮半島から出雲を経て日本全体に拡がったと教えられてきた。その考え方を踏襲すれば、地理的にいって、東北には鉄文化は最後に伝えられたことになる。しかし、これも奇妙なことになる。東北よりも早く鉄文化が伝わった場所ではなく、最後に伝わった東北で、突然変異のように、日本刀という文化が花開いたということになるが、奇妙な理屈に思える。

鉄文化は、実は、朝鮮半島からではなく、北方ロシア沿岸から伝わったというのが三番目の問題提起である。

この点に関しては昔からさまざまな論議があって、決定的な答えがないまま議論ばかりが続いていた。しかし、中鉢美術館に掲示されている資料は鉄の北方伝来を決定付けるものである。

北方の「アイアンロード」

中鉢氏は、北方ルートでの鉄の伝来経路を、南のシルクロードに対抗して、「アイアンロード」と言う。その証拠はまだ数は少ないが、いくつも存在する。

まず、ロシアアルタイ系の「アキナケス剣」が秋田で出土し、東北と大陸のつながりが見えてくること。

次に、佐藤矩康医学博士が行った非破壊エックス線CT法という手法により、前出の「蕨手刀」をはじめとした東北の出土刀と、サハリン・シベリア・モンゴル・アルタイ・沿海・西アジアの大陸の出土刀との比較により、強い関連性が発見されたこと。

これらにより、鉄の発祥の地・ヒッタイト→アルタイ系のアキナケス剣→蝦夷の蕨手刀へと繋がる「アイアンロード」が見えてくる。

問題提起その④…大和朝廷の争いの原因再考

古代から大和朝廷と東北蝦夷との間で幾度かの争いがあった。その理由は、蝦夷が朝廷に従わない「まつろわぬ民」だからとか、あるいは、東北が馬や金の産地で、これを奪おうとしたからだと言われてきた。

しかしそれだけの理由で、甚大な犠牲を出しながら、何度も何度も、数万規模の、しかも大和朝廷の保有する軍隊のかなりの勢力を派遣するものだろうか。

しかし、これを日本刀の生産基地問題、あるいは鉄の生産基地問題と併せて考えてみたら、謎は解けるのではないか。つまり、最大かつ最先端の日本刀生産地で、しかも鉄の生産基地である東北の完全支配を目指したとするならば、それだけの労力をかけても引き合うと考えたのではないか。

◇

以上が、四つの問題提起のほんの概要である。読者の方々はいまひとつ物足りない、もっと知りたいと思われることであろう。

その上、今回の取材でお聞きした内容すべてをここに網羅したわけでもない。

また日本刀ルーツ問題から開始した東北史・日本史の書替え問題は、この一回だけでは到底終わりそうもない。一応の結論が見えるまでこのシリーズを続けようと思う。

その探求をより専門的に行うため、中鉢氏が会長をしておられる「舞草刀研究会」に即日入会し、年一回発行の会報をすべて入手した。ここに、あらためて日本刀と東北の歴史研究を開始することを宣言したい。

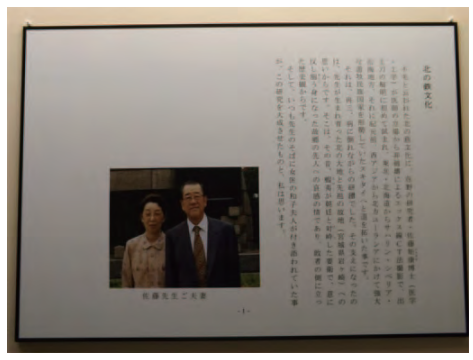
◇

注）「舞草刀研究会」は二二年の活動の歴史を持ち、会員数約百名、海外の会員も所属している。

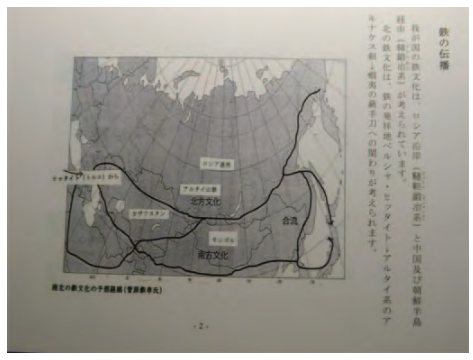
◇

今回の取材中、中鉢氏が特に力説されていたことがある。それは、日本刀は武器ではなく、日本人の精神文化の象徴であり、邪気を払うための守り刀でもあり、余程のことがない限り、武器として使用しない。抜く時は最終的な手段として、「伝家の宝刀」としてであると。

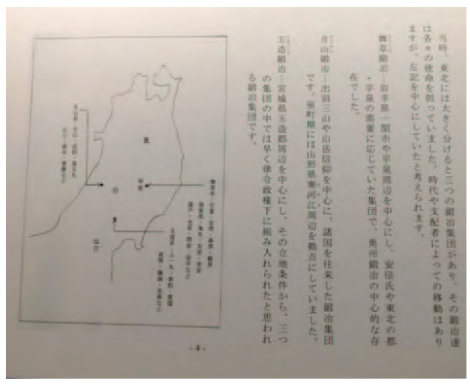
また日本刀は売買対象としてはならない。日本刀には高い精神性が宿る。その精神性は、日本刀を作り続けた奥州鍛冶の高い精神性の反映であると。したがって、互いの信頼関係で、売買ではなく、託し託される事だと。（続く）



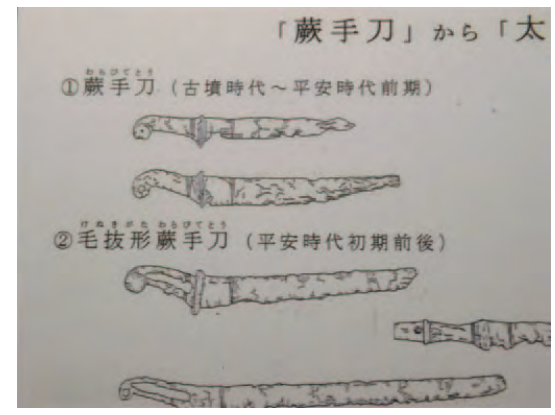
北の鉄文化



鉄の伝播

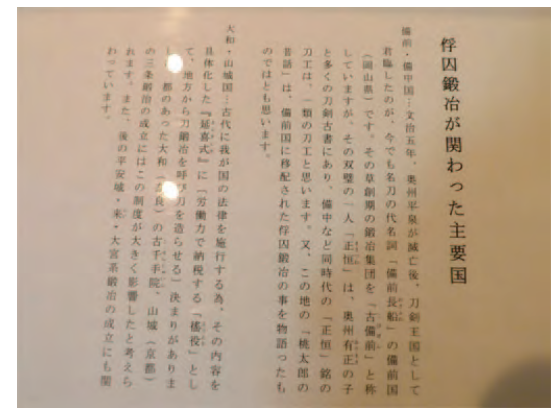


三つの鍛冶集団

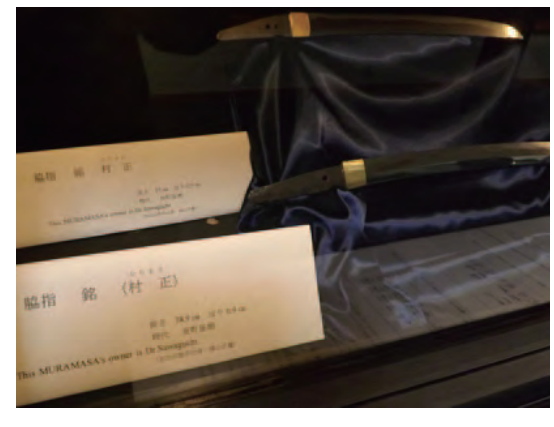


蕨手刀

在銘最古の奥州刀　閑寂（ふさちか）



名刀・備前の草創期・古備前も俘囚鍛冶集団



妖刀と言われた村正も奥州刀の流れを汲む

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

奥羽越列藩同盟、そして玉蟲左太夫が遺したもの

大川真

シリーズ：東北の偉人たち

第二回

東北には多くの偉人がいた。東北人らしく、小手先ではなく、真正面から時代の状況に真摯に向き合い、大胆かつ自由で、グローバルな成果を残した偉人たちがたくさん存在した。時代を先取りし、日本をリードしてきた偉人たちである。

いま、この大震災とそこからの復興実現という難局にあたり、支援の手は同時代人からのものにとどまらない。多くの先達の危機に立ち向かう勇気と意気込み、そして知恵に学ぶべきものは多い。

こうした観点から、シリーズで、多くの東北の偉人を取り上げていく。

今回取り上げるのは奥羽越列藩同盟で活躍した玉蟲左太夫である。いまや知る人も少なくなったが、その思想の先進性には注目すべきで、明治時代まで生き残り、活躍して欲しかったと思う人物である。

大川　真（まこと）氏略歴

一九七四年　群馬県生まれ（父は岩手県出身）
一九九三年　群馬県立沼田高等学校卒業
一九九八年　東北大学文学部卒業
二〇〇〇年　東北大学大学院文学研究科博士課程前期修了（修士（文学））
二〇〇八年　東北大学大学院文学研究科博士課程後期修了（博士（文学））
二〇一一年三月まで東北大学大学院文学研究科助教。同年六月から吉野作造記念館に勤務（副館長）。
国際日本文化研究センター共同研究員
山形県立米沢女子短期大学非常勤講師を兼任。
専門は日本政治思想史・文化史

大川真氏

―石川裕人さんと震災で犠牲になった方達へ捧げる―

劇団OCT／PASS主宰・劇作家の石川裕人（本名、裕二）さんが二〇一二年一〇月一一日に五九歳の若さで亡くなられた。石川さんとは震災後から一緒に仕事をする機会が多くなった。亡くなる一ヶ月前も私が携わっている宮城県採択の人材育成事業（大崎の「宝（たから）」＝「人（びと）」プロジェクト）で、大崎市古川にて若い世代を対象としたコミュニケーションワークショップをやってもらった。一〇月一二日、OCT／PASSの劇団員の方から突然の訃報を聞かされた後、私の心には思いのほか大きな空洞が出来た。私はかけがえのない「同志」を失ったのだった。

温厚な石川さんは震災以降怒っていた。政治が被災地の生活を無視して政争に明け暮れ、中央省庁が復旧・復興を口実に予算を乱用していることにひどく怒っていた。石川さんの怒りは、最後の作品「方丈の海」にも表出していた。

近現代以降、日本が中央集権化を加速度的に進める中で「富める地」と「貧しい地」をつくり出した。東北に生まれた多くの人たちは何かしらのコンプレックスを持って生きている。経済的には確かに顕然たる格差がある。しかし文化的に格差は本当にあるのだろうか。その場合の格差はいったい何に基づいているのか。

東北人は我慢強くおとなしいとよく言われ、震災後もその言動が称賛されたが、復興の遅滞にはみな心底怒っている。怒っても甲斐がなく疲れるだけなので、そうしないだけだ。だから石川さんは代わりに怒っていた。震災で犠牲になった方々の分も含めて。今は石川さんも震災で犠牲となった方々と一緒に演劇をしている。だから私が代わりに怒ろう。石川さんや亡くなられた多くの方々に敬意を示し、怒りの力を攻撃や批難することにふり向けるのではなく、私たちの血肉から内なる東北の文化を呼びさまし、「産み」の力へと変えていこう。今回紹介するのは、幕末に活躍した仙台藩士玉蟲左太夫である。一九九九年に東北放送で「世界を見たサムライ・ルポライター―悲劇の仙台藩士・玉蟲左太夫―」という番組が製作されたが、石川さんも出演しこの番組のために書いた戯曲「超サムライ　玉蟲左太夫」も上演され話題となった。私は思想史家なので、玉蟲左太夫の政治思想に光を当てていくことにしよう。

奥羽越列藩同盟とは何だったのか

まず奥羽越列藩同盟から説明することにしよう。

東北地方は、日本の近代化の過程において起こった戊辰戦争での最大の激戦地でもある。一八六八（慶応四）年一月に起きた京都鳥羽・伏見の戦いを皮切りにして、幕府軍と、薩摩・長州などの西南諸藩を中心とした新政府軍とが各地で激しい戦闘を展開し、翌一八六九（明治二）年五月の函館五稜郭の戦いにて幕府軍は降伏し、戊辰戦争は終結する。奥羽越列藩同盟とはこの戊辰戦争中、一八六八（慶応四）年五月三日に東北の二六藩、後に新発田藩ら北越の六藩も加わり結成された新政府軍対抗への軍事同盟である。注目したいのは、奥羽越列藩同盟は、すでに恭順の意を示した会津・庄内両藩の「朝敵」赦免を嘆願する目的で結成されたものであり、また親藩である会津藩、譜代である庄内藩を、外様である仙台、米沢両藩を中心とした奥羽諸藩が助けるという、藩の立場の別を越え東北の多くの藩によって結成された、いわば「義」と「情」の地域連合であったということである。

奥羽越列藩同盟の組織は、盟主を輪王寺宮、総督を仙台藩主伊達慶邦、米沢藩主上杉斉憲、参謀を小笠原長行、板倉勝静とするが、注目すべきは政策決定機関として白石に奥羽越公議府を置き、最高機関を奥羽越列藩会議にしたことである。同盟成立直前の、一八六八（慶応四）年閏四月二九日に仙台にて調印された奥羽越列藩同盟盟約書を見てみると、第六条に「一、大事件列藩集議、可帰公平之旨、細微則可随其宜事（大事件は列藩集議し、公平の旨に帰すべし。細微は則ちその宜きに随ふべき事）。」とあり、大藩の意向が優先されるのではなく、あくまで諸藩の集議によって政策を決定したことがうかがえる。

ところで幕末における「集議」（衆議）や「公論」などは、一般的には、坂本龍馬「舟中八策」（一八六七年）の「一、上下議政局ヲ設ケ、議員ヲ置キテ万機ヲ参育セシメ、万機宜シク公議ニ決ベキ事」や五箇条の御誓文（一八六八年）の「一、広ク会議ヲ興シ、万機公論ニ決スベシ」など、新政府側の政治構想の先進性を示す要素として理解される傾向があるが、奥羽越列藩同盟の「集議」重視の政治システムは、明治維新の「敗者」＝「遅れた」「敗れた」地域である東北にも先進的な政治構想が存在していることの証左と言いうる。以下、奥羽越列藩同盟の中心的なイデオローグの一人である玉蟲左太夫諏茂（やすしげ）を取り上げ、彼の構想した東北、日本の将来像、言い換えれば、西南諸藩のリードによって建設された明治国家とは異なる、もうひとつの近代日本像を掘り起こすことにしよう。

玉蟲左太夫の生涯

玉蟲左太夫は一八二八（文政六）年に仙台藩士玉蟲平蔵伸茂の七男として生まれた。玉蟲左太夫の祖父玉蟲十蔵尚茂（たかもち）（一七四四年～一八〇二年）はそれほど高位には無かったが、十八世紀後期の仙台藩政で活躍した人物である。左太夫は仙台藩校養賢堂にて斎藤真典に学び、その学才を認められ、仙台藩士荒井東吾の養子となった。荒井家長女虎婦との間に一女をもうけるも、虎婦が死去した一八四六（弘化三）年には、思うところあって養家である荒井家を出奔し、江戸へ向かう。糊口を凌ぎながら、大学頭林復斎の私塾に入る。当初は下僕として庭掃きなどをしていたが古詩を朗吟しているところを復斎が気づき、左太夫の非凡な学才を見抜いて子の学斎の教師、その後、林家塾の塾長に任じた。この間に養賢堂学頭をつとめた大槻磐渓の知己を得て、一八五四（安政元）年には仙台藩順造館に移り監学となる。一八五七年（安政四）には林復斎の従兄弟にあたる函館奉行・堀織部正利熙（としひろ）に近習として蝦夷地をめぐり、『入北記』を記す。この『入北記』での精緻な筆記が幕閣の目にとまり、一八六〇（万延元）年一月二二日に、日米修好通商条約の批准を行うことを目的とした遣米使節団に加わり横浜を出航する。左太夫は使節団の正使新見豊前守正興の従者という立場でポーハタン号に乗船した。使節団の副使は村垣淡路守範正、立合は小栗豊後守忠順。勝海舟や福澤諭吉は咸臨丸に乗船した。左太夫たちは同年九月二八日無事に帰国した。一八六六（慶応二）年には仙台藩校養賢堂指南統取に就任。一八六八（慶応四）年には先ほど述べてきたように戊辰戦争が勃発するが、左太夫はこの時に軍務局議事応接頭取に就任している。一八六九（明治二）年には榎本武揚と気仙沼にて合流を図るが、志津川で捕らえられ獄中で切腹した。短い人生ではあったが左太夫の地元である仙台・宮城にはいまだに根強いファンも多い。約十ヶ月におよぶ渡航の様子や諸外国での見聞を左太夫が日記として記録したものが『航米日録』（全八巻）である。

「仁政」が実現された西洋

今までの左太夫に関する多くの書籍は次のように左太夫の西洋観を説明する。すなわち、左太夫は西洋を「夷狄」と蔑視する当時の一般的な見方を当初は堅持していたが、その後、ポーハタン号でアメリカの水兵達と苦楽を共にし、アメリカ本土で現地の人々から歓待されたことによって、西洋観がより友好的なものへと変化していったのである、と。この説明そのも

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

のは大きく外れているのではないが、『航米日録』を詳細に検討すると違った事実も見えてくる。

使節団のほとんどの日本人は、「大抵時規・羅紗・天鵞絨ノ類ヲ求メントテ、空シク市中ニ日ヲ送リテ帰ルノミ。政度・形勢ヲ探求スルニ志アルモノナシ。且ツ一人ニシテ二三個或ハ四五個ヲ得ルナド、定テ帰テ利ヲ得ント欲スル為ナラン。価ノ賤キヲ択テ奔走ス。実ニ見苦シキニ非ズヤ。」と、時計や羅紗・天鵞などの珍しいお土産品を購入しようとアメリカで行動していたのに対し、左太夫は「予学校ヲ尋ネント頻ニ願ヒドモ、誰アリテ付キ副ヒ行クモノナク、竟ニ其願ヲ遂ルヲ得ズ。況ンヤ貧院・幼院ニ於テヲヤ。是皆形勢・風俗等ヲ探索スル場ニシテ、第一ニ尋ヌベキ処ナリ。」というように「学校」・「貧院」・「幼院」などを視察しようと強い目的意識を持っていた。ところでなぜ彼はアメリカの学校や「貧院」・「幼院」などの社会福祉施設を視察しようと思ったのか。

一つは、中国に渡ったイエズス会宣教師艾儒略(Giulio Aleni)が著した『職方外記』（一六二三年刊）や幕末の日本でもっとも大きな影響を与えた地理書・西洋事情書である魏源『海国図志』（一八四二年刊）などがもたらした情報が大きいと言える。これらの書には、西洋では「貧院」・「幼院」などが存在していることが記述されており、それらを読んだ当時の知識人たちは開明的な西洋観を持つことができた。ただし左太夫の場合は次の理由が大きい。それは彼が、仙台藩養賢堂学頭をつとめ左太夫ともに奥羽越列藩同盟の中心的イデオローグの一人大槻磐渓（一八〇一年～一八七八年）の教えをうけ近い立場にあったことである。

大槻磐渓の父、大槻磐水（玄沢。一七五七年～一八二七年）は杉田玄白、前野良沢に学び、『蘭学階梯』、『重訂解体新書』など三百を越える著作・翻訳書を著した近世中後期を代表する蘭学者であるが、著作のひとつにロシアからの漂流者からの聞書である『環海異聞』（一八〇七年成立）がある。一七九三年に仙台藩領石巻を若宮丸にて出帆した津太夫ら漁民たちは八ヶ月の漂流の後にアリューシャン列島にたどり着いた。その後、ペテルブルクにてアレクサンドル一世に謁見し、八年の滞在生活と二年間の航海を経て一八〇四年ロシア使節レザノフにより長崎に送還された。『環海異聞』では、津太夫らが丁重な扱いを受け、またロシアは日本を「帝国」として同等国として見なしていること、また首都ペテルブルグでは病院などの社会福祉制度が充実していることが記述されている。当時の日本の蘭学の中心であり開明的な国際意識を持っていた大槻家に左太夫が近しかったことは、彼が渡米に際して、「貧院」・「幼院」・「学校」などの教育・福祉施設を視察しようとする意識に結びついたと言えよう。

左太夫がアメリカ社会に見いだしたもの

ワシントンに滞在しホワイトハウスを視察した際に左太夫は以下のような所感を抱いた。

尤貌列志天徳（プレジデント）ノ居宅ナレドモ、城郭ヲ経営セズ、他ノ家ニ異ナラズ。唯海岸ノ要地ニ砲ヲ設ケ、此ヲ堅固ニスルノミ。蓋シ花旗国（注・アメリカのこと）ハ共和政事ニシテ一私ヲ行フヲ得ズ。善悪吉凶皆衆ト之ヲ同シ、内乱ハ決シテナキコトトスルナリ。故ニ内ヲ守ルハ粗ニシテ、専ラ外寇ヲ防グノミ。（『航米日録』巻三）

左太夫は合衆国の元首である「尤貌列志天徳」（大統領、当時の大統領は第一五代ジェームズ・ブキャナン）の住居（ホワイトハウス）が、一般の住居とさほど変わらないことにまず驚く。それは大名や将軍が荘厳な城郭を住居としているのとは対照的であった。また別の箇所では、ブキャナン大統領に市民が気軽に話しかけ、また彼も対等な立場で応じている様子にも驚嘆している。共和政治については、君主の「私」ではなく国家の「公」から行われる政治形態であり、治者・被治者の区別なく一体となっており、国内がよくまとまっている、したがってアメリカは海防に集中できるという極めて高い評価を左太夫はしている。一方で日本は、君主に謁見する機会もほとんどなく、上の者が下の者に威張りちらし、情が通うことがない。しかし有事の際には君臣一体とならないと対応できない。「然ラバ礼法厳ニシテ情交薄カランヨリハ、寧ロ礼法薄クトモ情交厚キヲ取ラン歟。」と左太夫は率直な感慨を漏らす。

彼が接したアメリカ市民は「風俗極メテ淳樸能ク信実ヲ尽シ、気象寛裕人ヲ疑ハズ。予等ヲ待遇スル親戚ニ異ラズ。」と純朴で誠実であり、あたかも自分の親戚のように親切にもてなしてくれると左太夫はたいへん感激した。こうしたフレンドリーでホスピタリティーにあふれたアメリカ市民の気風に左太夫は好印象を抱き、彼等の社会を支えている共和政治を理想化していったのである。

左太夫の見果てぬ夢

冒頭でも述べたように渡米の八年後に戊辰戦争が勃発し翌年には左太夫は四十七年の生涯を終えてしまった。左太夫がアメリカで得た経験・知識の一部は、奥羽越列藩同盟の「集議」重視の政策決定システムに活かされたが、彼が夢見たこれからの国家とは果たしてどのようなものであったのか。それをうかがえる資料が仙台市博物館にある。「人心ヲ和シ上下一致ニセンコトヲ論ス」という断簡三枚の資料で『航米日録』など左太夫関係資料四八件と一緒に一九九九年に仙台市から有形文化財の指定をうけた。成立年代は不明であるが、帰国から戊辰戦争勃発前の時期に仙台藩に献上したものと推測される。あいにく私は原資料を直接見る機会はまだ得ていないのであるが、二〇〇四年に刊行された『仙台市史』において難波信雄氏が丁寧にその内容を解説している。それによれば海外との人材交流を活発にして日本が豊かになっていくこと、また立場や身分にこだわらずに国民全体が「人心一和」となって議論し政策を考えていくことなど、当時としては画期的な内容が盛り込まれている。そしてほとんど看過されていることであるが、こうした先進的な政策が幕末の東北で提言されていることは震災後で大きな意味を持つと私は信ずる。

寄稿者最新著書紹介

『近世王権論と「正名」の転回史』
御茶の水書房（2012/10）
p306
価格：￥ 7,980（税込）

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

「地域資源」としての東北の温泉

東北の地域資源

東北の復興に関して、「地域資源」という言葉を耳にすることが多い。地域資源の活用が復興に重要な意味を持つ、というようなことがよく言われる。この地域資源とは何かということについての定義はいろいろあるが、二〇〇七年に施行された「中小企業による地域産業資源を活用した事業活動の促進に関する法律」、いわゆる中小企業地域資源活用促進法を例に取ると、ここでは「地域産業資源」と言っているが、①自然的経済的社会的条件からみて一体である地域（以下単に「地域」という。）の特産物として相当程度認識されている農林水産物又は鉱工業品、②前号に掲げる鉱工業品の生産に係る技術、③文化財、自然の風景地、温泉その他の地域の観光資源として相当程度認識されているもの、のうちのいずれかに該当するものを地域資源と定義している。

この法律で都道府県知事は、「当該都道府県における地域産業資源活用事業の促進に関する基本的な構想」を作成して認定を申請することができるとされているが、その中で地域産業資源の内容についても定めることができる。これを受けて各都道府県では様々な「地域産業資源」が指定されており、それらについてはそれぞれの都道府県のサイトで確認することができるが、東北に関しては特に③のカテゴリにおいて実に多くの祭りと温泉とがリストアップされている。これらが東北に共通する「地域資源」であることは疑いないところである。

東北の温泉

このうち祭りについては本紙面で砂越氏が特に力を入れて取り上げておられるのでそちらに譲るとして、ここでは温泉について見てみたい。東北の人にとって温泉というのはあまりにも身近で、そのために逆にその地域資源としての価値を量りかねているのではないかと思うからである。

火山の国である日本はその恩恵で世界でも有数の、数多くの温泉を持つ国である。その日本には、温泉地が平成二二年のデータでこの狭い国土になんと三一八五もある。そのうち、東北六県と新潟には合わせて七六七の温泉地がある。全国の温泉地の二四・一%、すなわち四分の一が東北圏にあることが分かる。

その一方で、宿泊施設数は二六〇五で全国の一四〇五二に対して十八・五%、年間延宿泊利用人員が二〇一九四五五九人で全国の一二四九二五二七二人の十六・二%と、いずれも温泉地の割合に比べてかなり低い。これは、東北圏にある温泉が、大規模な宿泊施設や温泉街を伴ったものではなく、いわゆる「秘湯」を含む中小規模のものが多いことの表れであると言える。言い換えれば、鄙びた温泉が東北には多いということである。

温泉を歓楽と捉えると、こうした温泉は物足りないかもしれないが、大自然の中でゆったりとした時間を静かな空間で過ごして日常と異なった環境に身を置くということを考えた場合には、東北の温泉はまさにうってつけである。

東北には以前も紹介した通り、全国でも屈指の地熱資源があるが、それがこうした豊富な温泉を生み出している。東北には今も湯治の習慣が残るが、これは冬季の厳しい環境への対応、農閑期の骨休めという意味合いがある。東北の人にとって温泉は大いなる大地の恵みであり、まさに貴重な地域資産である所以である。

実際、歴史ある温泉が東北圏には数多くある。開湯から千年以上の歴史を持つ温泉が少なくとも東北六県に二四ある。その中で最も歴史があるのは西暦一一〇年に吉備多賀由（きびのたがゆ）によって発見されたという伝承を持つ山形市の蔵王温泉で、次いで西暦三〇〇年代に発見されたという福島県いわき市のいわき湯本温泉、同じく四〇〇年代の秋田県大館市の大滝温泉が続く。東北に住む人と温泉との関わりは実に長い歴史を持っているのである。

温泉の湧出量で見ても、全国的には自噴泉、すなわち自然に湧出している温泉が七六〇〇二四L／分であるのにに対して動力泉、すなわち掘削技術の発達によって人為的に汲み上げている温泉が一九二六五三五L／分と、圧倒的に動力を用いて温泉が多いが、東北圏に限ってみると自噴泉一九六〇八三L／分に対して動力泉三九六五〇二L／分と、自噴泉の割合が高くなる。ということは、掘削して掘り当てた温泉ではなく、昔からそこに湧き出ていた温泉が多いということである。

質の高い東北の温泉

こうした歴史的な側面とは別に、東北圏の温泉は質の高さでも誇るべきものを持っている。まず、環境大臣が指定する「国民保養温泉地」というものがある。全国でこれまで九一箇所の温泉地が指定されているが、東北六県と新潟にはそのうち二二箇所がある。このうち、青森市の酸ケ湯温泉は、一九五四年に栃木県の日光湯元温泉と共に指定された国民保養温泉地第一号、福島県二本松市にある岳温泉は翌一九五五年に指定された第二号である。

また、全国津々浦々のすべての温泉を巡ったことで知られる松田忠徳氏の「温泉教授の日本全国温泉ガイド」（光文社新書）では全国二二七の温泉が推薦されているが、そのうち東北六県と新潟の温泉は六九を数え、実に全体の三分の一近くを占めている。この書では、氏が「マガイモノの温泉」と断じる「循環・濾過・塩素殺菌風呂」は紹介されていない。そうした中で東北のこれだけの温泉が紹介されているというのは、それだけ東北の温泉の質の高さを表していると言える。

先ほど、東北には秘湯を含む中小規模の温泉が多いと書いたが、この「秘湯」という言葉を初めて使ったのは、「日本秘湯を守る会」である。日本秘湯を守る会は、一九七五年に、高度経済成長真っ盛りという時代背景にあって、「今の状況は、本来の旅の姿ではない。人間性を置き忘れている。旅の本質を見失っている。何時の日か人間性の回復を求め、郷愁の念に駆られ山の小さな温泉宿に心の故郷を求め、本当の旅人が戻ってくる。旅らしい旅が求められる時代が来る」、「日本の温泉のよさを保ち、環境保全に努める経営理念を相互に啓発・啓蒙する温泉旅館を集めて共同宣伝、相互誘客を図る組織の結成を」と提唱した故岩木一二三氏によって設立された。設立当時三三軒だった会員宿は今や全国に一八八を数えるに至ったが、このうち東北六県と新潟には合わせて七七ある。実に全国の「秘湯」の四一%が東北圏に集中しているのである。

病を癒す湯として全国から人が集まる秋田県仙北市の玉川温泉は、様々な角度から「日本一」の温泉である。まず湧き出る湯量九〇〇〇L／分は一箇所の源泉としては文句なしの日本一である。またその湧き出る温泉はPH一・一というとてつもない強酸性の湯で、この酸性度も日本一である。温泉の湯温は沸騰寸前の摂氏九八度でこれまた日本一である。これほど強烈ではないが、東北圏にはその泉質の良さや効能の高さで知られる温泉が数多くある。

地域資源としての温泉の活用

温泉を地域資源として活用しようという動きは震災前から既にあった。その典型例が、先に挙げたいわき湯本温泉である。いわき湯本温泉旅館協同組合では、温泉の魅力を再確認し、その保健的機能を活用するためとして、独自に「温泉保養士（バルネオセラピスト）」を養成する事業を二〇〇一年から行っている。

きっかけとなったのは、ドイツの温泉保養地との交流だったという。ドイツでは温泉が医療の一環として取り入れられ、温泉地にて長期間の療養が行われているという取り組みの事例を知った。先に挙げたように、日本にも「湯治」の文化があるが、それをコーディネートできる人材がいなかった。

そこでいわき湯本温泉旅館協同組合では、社団法人日本温泉療法士協会を立ち上げ、温泉医学、予防医学に基づいて、温泉の持つ保健的機能を引き出す知識、技術を習得し、温泉療法を活用した健康づくりを安全かつ適切にアドバイスできる人材の育成を始めた。日本温泉保養士協会が実施する養成講習会で規定の講習を修了し、認定試験に合格した人材を温泉保養士（バルネオセラピスト）として認定している。認定の有効期間は五年間で、認定を継続するためには更新講習会の受講が必要となっている。お膝元のいわき湯本温泉では、全ての施設に有資格者がいて、宿泊客・日帰り客などからの相談に応じてアドバイスを行っているということである。

この事例からは、地域資源とは、それだけでは地域資源たり得ず、それを理解し、活用する人材がいてこそ地域資源となるということが見て取れる。その意味では、結局のところそうした「人」こそが最大の地域資源と言えるかもしれない。

復興にも温泉の活用を

さて、温泉について語られる際によく言われることの一つに「転地効果」がある。転地効果とは、日常生活を離れ、いつもと違った環境に身を置くことによって、心身ともに気分転換を図れるということである。旅行がその最たるものとされるが、温泉地への旅行においては温泉そのものの効能が上乗せされるため、さらに効果が高いと考えられる。特に山間の「秘湯」の多い東北圏の温泉では、これに森林浴の効果も期待できる。

転地効果をしっかりと得るためには、まず目的地として自宅から一〇〇㎞以上離れた場所が望ましいとされる。また転地効果はおよそ一ヶ月の滞在を経ると「慣れ」が生じて効果が減殺されてくるため、四、五日から一週間程度の期間が適していると言われる。こうした条件はまさに、東北における「湯治」そのものと言える。東北の人たちは古くから湯治を通して、心身の疲労を癒していたわけである。

復興までの決して近くはない道のりの中で、この温泉についての魅力を再度見直したい。東北にとって温泉は、域外の人を呼び込む地域資源としてだけでなく、否が応でも長丁場となる東北復興の道程において、復興に携わる全ての人たちが心身のストレスを解消するまたとない手段としても積極的に活用でき得る資源でもある。

執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/
Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

大友浩平氏

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

『今こそ東北人　龍馬に会う』

本誌創刊から半年が過ぎ、初めて年の瀬を乗り越えるという事もあり、あらためて私も初心の再確認などをして、自分なりの仕切り直しをしてみたいと思う。

まずは今更ながら、「奥羽越現像」という自分の名前の話をしてみる。もちろんこれは本名ではなく、ペンネームのようなもの、更には「屋号」と私は呼んでいる。二〇〇八年に始めたブログのタイトルとして初出したもので、もともとは個人名としてではなく、「奥羽越現像株式会社」とでもいう、映画会社か何かの設立を夢想して思いついたものだった。しかし「現像」が名前っぽく聞こえる事から、自らの名として名乗るようになっていった、という次第である。

奥羽越現像（おうえつげんぞう）氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出没し演奏する。フィドル（ヴァイオリン）担当。

「奥羽越」とは、奥州・羽州・越州即ち現在の東北六県に新潟県を加えた地域を指す。私自身は山形県出身なので羽州人という事になるが、この三州は古代、律令制施行以前まで大和政権統治外の地「えみしの国」とされた事で、現在の私にとってアイデンティティの所在となっている。奥州は私の人生を変えた、と言える地・岩手と現在住む宮城を含むので当然として、新潟県は特に北部が山形県庄内地方と文化言語が共通しており、東京への通り道でもあった事から馴染み深かった。とは言え、新潟と東北を同一視する例は一般には限定的であり、新潟県人の多くは東北と一緒にされる事を快しとしない、とはよく聞く話だ。だからと言うのではないが、私の「奥羽越」には「奥羽の概念を越える」という意味も含まれている。

しかし歴史通の方なら「奥羽越」が既に、幕末の東北・新潟大同盟として実現した「奥羽越列藩同盟」として登場した名称である事にお気づきだろう。しかしキーボードで「おううえつ」と検索しても「奥羽悦」と出てしまうほど、現在はマイナー単語である。

現像、とは庄内の実家が祖父、父と続く写真館で、兄と姉も写真が上手く、私は下手だが代わりに（？）映画を目指しているという、フィルムとの因縁、そして「夢を形にする」事も合わせて意味している。

＊

さて、映画を志すならば普通日本では東京なのだが、何故か私には「これから映画をやるならば、東北である。」という根拠のない確信が長年あって、「東北回帰」する事になったのである。小説家や漫画家、それに音楽家などは現在地方でも充分活動できるが、映画作家となるとまだまだ難しい。かのハリウッドの脚本家たちも口を揃える。「ロサンゼルスなどに住まない方がよほどいい脚本が書けるが、ここに住まないと映画の仕事ができない。」（『脚本を書くための101の習慣』カール・イグレシアス）つまり創作の源泉としては地方の方が優れているのに、映画製作に必要な資金・人材・組織は大都市に牛耳られている。作家は東西問わず、そのジレンマの中にいるのだ。しかしいつまでもこのままでは、「文化的中央集権」から芸術家が解放される日は来ない。映画が、東北人のアイディアと技術、資金で作られ、また利益・収益が東北に還元される時、初めて人々が芸術を産業として生活できる国、「芸術立国」としての東北になるのだと、私は考えている。なぜ、芸術立国か？震災からの復興に必要なのは観光資源であるというが、はじめに観光ありき、なのではなく、まず求められるのは現代東北人の日々生きながら生み出す文化である。中央志向を持たず、東北の地で闘いながら表現を続ける芸術家の存在こそ、これからの東北の重要な活力源だと思うのだ。

それにしても、映画は急速にその姿を変えつつある。私がかつて映写技師を務めた東京の映画館がフィルムの映写機を撤去し、デジタルプロジェクターに完全移行した。これはもはや全国、全世界的な流れで、フィルムとして生まれた映画がフィルムである事をやめようとしているのだ。ところが、地方の小さな劇場にはこの設備転換の資金がない場合があり、かと言ってフィルムは作られずもう入ってこないという、またしても地方の映画文化の衰退につながりかねない事態が危惧されているのである。

＊

先日、借りたDVDも所謂映画ではなく、「映画のような映像」が話題になったNHK大河ドラマ『龍馬伝』だった。心中複雑ではあるが、今後の映像表現の可能性は感じさせる。第四十二話「いろは丸事件」をあらためて観たいと思っていた。

商船いろは丸を紀州藩の船にぶつけられ沈められた坂本龍馬が、徳川御三家のひとつである紀州から賠償金を勝ち取るために、長崎中に土佐の座敷唄「よさこい節」の替え歌を流行らせ、民衆を味方につける。「これは幕府との戦」と命を張る龍馬、その地元文化を武器にする心意気が見事だった。もちろんドラマは創作の部分もあるだろうが、欧米列強を相手にする新しい日本を作ろうと、それまで徳川だけでも三百年、総合すれば六百年に及ぶ“武士の時代”を終わらせる為に奔走した三十三年の生涯の中で、幾度も生命を狙われ、改名し、その上で尚活躍を続けた彼の名声を知らぬ日本人はいるまい。ドラマ中の彼のセリフ「命ば狙われるくらいの事をせんと、日本は変わらんぜよ。」

このように先見の明を持ち、時代の変革に挑んだのは西日本の人間だけではない。他ならぬ、同時代の奥州・仙臺に玉蟲佐太夫がおり、薩長主導の新政府に対して、訪米の経験と豪快な気質でアメリカの議会制を導入した北方政権の樹立を目指した。彼の師・大槻磐渓は現在の天皇象徴論を既に説き、この点で仙台は薩長の先を歩いていたと言えるかも知れないし、共和制を理想としていた龍馬とは同志となり得たかも知れない。しかし龍馬は暗殺され、玉蟲の存在も奥羽越の敗戦により闇に葬られてしまった。

＊

これは、遠い時代の出来事だろうか。日本が変わらなければならない、それは今、私たちが生きているこの時代そのものではないか。その今、一体誰が命を狙われ兼ねない活躍をして、日本を変えようとしているのだろう？

今はそんな物騒な時代ではない？権力者にとって不都合な事実は隠蔽され、反原発を唱えた芸能人は仕事を失うという。そもそも、本誌の趣旨である「東北の独立」にしろ、国内の地方の独立運動に対してその性格によってはある種の団体が攻撃し、また国はこれを内乱罪として当事者を死刑に処する事さえできるのだ。自分の思った事、信念に従って行動する事の危険さは、時代を越えて存在している。これは、歴史の続きなのだ。

＊

ところで、土佐・高知県とは不思議な所である。本誌先月号で、私は九州を東北と最も縁遠い地と書いたが、四国もまた負けず劣らず東北人にはピンとこない土地だと思う。坂本龍馬にしても、当時の奥羽地方には由縁も足跡もなく、むしろ更に北の”蝦夷地“の開拓を夢見ていた、とされる（『龍馬伝』にも登場した、神戸海軍操練所の教授方・佐藤与之助は庄内出身で、後に鉄道建設に尽力した人物）。

実はこの土佐地方、古代より中央からの流刑者が多く送られてきた土地柄であり、その面では蝦夷の国・東北と非常に似通った性格を持っている。弘法大師・空海は隣国・讃岐の出だが、出自は佐伯部、即ち何処かの地方の”えみし“にあると言われている。ただ、空海自身は”えみし“について「人に非ず。鬼・畜生の類」と断じており、必ずしも被差別民が他地方の被侵略民を同胞視するとは限らないようだ。かつて差別に苦しんだアイルランド人がアメリカに渡った途端、大陸の先住民の迫害に加わったように、坂本龍馬ももし蝦夷地に渡っていたら、アイヌ民族を苦しめたりはしなかったかなどと、邪推してみたりもする（しかし、妻のおりょうはアイヌ語を独学していたという）。

＊

それにしても、土佐高知県には現在も確かに龍馬を生み出した土壌と納得させる、人々の気骨を感じる事ができる。随分昔、東京から故郷高知へ戻った友人を訪ねて旅をしたのだが、友人は高知市内で活動する音楽家たちと共に、ライヴハウスをプレハブ小屋に手作りし運営していた。彼らは単独の弾き語りなどのスタイルが多いが、それぞれのレベルの高さに驚いた私が、「東京に出ても成功できるのでは。」と言うと、彼らはこう返す。「何故、東京に出るという話になるのかわからない。」と。私は衝撃を受けたものだ。才能がある人間は東京に出て活躍するのが当たり前、と考えている人間が、初めて「アイデンティティの在り処でやっていく事が大切だ」という人々の姿を目の当たりにしたのである（数年後、ここから全国的にファンを持つアーティストが誕生し、現在も高知在住のまま活動している）。九州人と同様に堂々たる性格を持ちながらも、中央志向など世の趨勢に左右されず、不器用ながら独力でも火のような信念に生きる。それが土佐人の魅力だと、私は思っている。

＊

思えば『龍馬伝』は二〇一〇年の放映で、つまりあの東日本大震災の前年であった。大河ドラマというのは、基本一年を通して放送するので、楽しみにしていても最終話まで観られずに亡くなってしまう人もいるという事を、よく考える事がある。しかしこの作品に関してはそれとは別に、震災後に亡くなってしまった人々、例えば福島の原発事故があって、父祖から受け継いだ、生活の全てとも言える土地を汚染された事に絶望し、自ら命を絶った人の事を考える。

彼らは『龍馬伝』を観ていただろうか。観ていたのだと考えると、心が痛む。歴史上の偉人の、困難に立ち向かった人生、それを表現した映像すらも、彼らの現実の、未曾有の困難の前には無力だったのか、と。だとすれば、映画やドラマの使命とは何なのだろうか、と。

震災、そして原発事故は、現代日本の暗部を抉り出し、問題点を浮き彫りにした、という。日本を、根底から変えなければならない、という。しかしその戦いに参加できぬまま消えていかねばならぬ人々がいて、戦いに赴く希望すら奪われ、命を絶つ人々がいる。現代は真に、自らも、そして子供たちすらも、生命をかつてない危機にさらしていかねばならない、残酷な時代である。それでも敢えて、生き残った人間は、互いに言葉をかけ合わねばならないのだ。

いま、死んではならない。我々は誰もが皆、龍馬なのだ、佐太夫なのだ、と。

私もまたこの「奥羽越」で、何を「現像」していけばいいのか。その問いを胸に、新たに生きてみたい。

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

郷土芸能・祭を支える人たち

（株）宮本卯之助商店（浅草）本社・太鼓館見学

郷土芸能 STREAM 取材企画

昨年の暮れ、十二月二二日、東京は浅草、神輿・太鼓・祭礼具・神具製作では老舗の（株）宮本卯之助商店を見学させていただいた。

今般の見学企画は、当新聞に何度かご登場いただいた公益社団法人全日本郷土芸能協会・小岩秀太郎氏と民俗芸能ＳＴＲＥＡＭ代表の西嶋一泰氏の呼びかけによるもので、祭好きの一〇名ほどが参加した。普通はなかなか見ることができない神輿や太鼓、その他の祭礼に使われる用具類の製作現場が見られるうえに、質問にも答えてくれるということで、当初の参加人数を超過するほどの参加者が押しかけた。

ガレキで作られた太鼓

案内役の浅野さんをはじめ、職人さんが、当企画参加者のために長時間に亘ってお付き合いをいただいた。

最初は本社で、太鼓の製作現場、獅子頭の修理の現場、漆塗りの工房、神輿の修理の現場などを見学させていただいた。もともと祭好きな見学者の質問は、まったく遠慮のない素人の、しかも思いも着かないような、まさに微に入り、細に入りの質問も多く、見学の時間を大幅に超過するほど長時間に及んだが、すべてに快く回答していただき、大変感激した。同時にいろいろな知識を得ることができた。あらためて、宮本卯之助商店の皆さんに感謝申し上げたい。

また、宮本卯之助商店は、今般の東日本大震災による郷土芸能の被災に関しては、積極的にさまざまな支援に取り組まれていることはまえもって聞かされていた。この見学によって、その支援の現場をまのあたりにすることとなった。

◇

最初は、太鼓の胴作りの部屋に通され説明を受けた。一本の木を刳り貫いて作られら胴をカンナで削り、仕上げる工程である。

さまざまな形、大きさのカンナや道具類が並んでいる。昔のカンナの刃砥ぎの厳しい修行の話も聞かせてもらった。

その部屋で筆者は、それまで見たものとは異なる素材で出来た胴が目にとまった。聞けば、宮城県のガレキの破片から組み上げられた胴だという。壊れた家屋から出たガレキ。素材はマツ、杉など不揃いであるが、まるで一本の立ち木からくり抜かれた胴のようにぴったり貼り合わされていて見事な出来栄えである。何よりも、ガレキがこんな形で活用されることにはまったく思い至ることなく、虚をつかれた思い。同時に、被災地の復興にどんなにか力を発揮するかと想像すると、こみ上げてくるものがある。製造現場は撮影禁止ということだったが、どうにも我慢できなくなり、無理を言って撮影させてもらった。そうしたら、さらに、同様にガレキでできた太鼓があるということで、その写真を拝借させていただいた。デビューは年明けの宮城・女川とのことだった。これらの太鼓にはぜひ被災者を勇気づけて欲しい。

次は太鼓の胴に皮を張る工程。この道六一年の職人さんと五年選手の若手の職人さんの組合せで、皮を張りながら、敲きながら、音を確認しながらみるみる内に完成していく。音に納得したところで、今度は大量の釘を印もない場所に整然と打っていく。その手際の良さに感服。職人技とはこのことと納得した。

見学者からは、皮素材に関する質問がえんえん続く。皮では牛が一番多く、馬もあるという。張り替えた皮から繰り出される音と修理前の音をどう調整するか、用途別の音の高さ調整など、職人さんに聞かなければわからないことを根掘り葉掘り聞く。かつては、浅草には太鼓屋が五〇軒ほどあったが、いまは三軒のみという。ベテラン職人さんは、自分が手掛けた太鼓は祭りに見に行くという職人魂にも感服。

二階には、神輿の修理・制作の現場がある。出来る限り、元の材料を使うという心遣いにも感服。その技の細かさにさらに感服した。

お隣は、獅子頭の修繕の部屋。そこには、これまで筆者が取材した宮城県牡鹿半島の各浜の獅子頭があった。泥にまみれているもの、これから取り掛かるもの、きれいに仕上られ、納品を待つばかりのものが並んでいた。知った場所の獅子頭は特に思い入れがある。そこの職人の方は、獅子頭の修理のみならず、胴幕の修理まで行うという。かつては縫い物さえしたことがなかったが、獅子頭の修理をするうち、どうしてもやらねばならないと一念発起して、一から裁縫の勉強をしたという。修理する前には必ず被災地現地に出掛けて、詳細に「取材」を行い、修理前の状態を復元するという。頭が下がる思いである。

◇

すべての製造現場を熱心に見学し、さまざまな質問を投げかけていたら、予定の時間を大分過ぎてしまった。ともかく大変貴重な体験であった。感謝、感謝。

◇

本社の見学の次は、少し離れた場所にある世界の太鼓資料館「太鼓館」の見学。そこでは、実際にほとんどの太鼓に触れるし、敲くとも出来る。

世界各地の太鼓を集めに集めて、その数約九五〇点。各大陸の主だった太鼓はすべて揃っている。

見学者の中には、本格的な太鼓打ちもおり、実際に敲いてみる。その即興の演技は見事なものだ。さすがに祭好き。

そのなかに、昔、穀物を入れていたであろう縄文土器に革を張った縄文時代の太鼓を想定して作った「トーキングドラム」もあった。筆者はことのほか縄文には思い入れ強く、感激した。日本の太鼓の始まりは縄文時代と勝手に解釈。そこから縄文人の祭りを想像する。楽しい時間であった。

偶然にもそこで宮本卯之助商店の営業の方とごあいさつ。筆者とは同郷で、ちょくちょく被災地を回っておられるとのこと。被災地情報を交換して、今後のおつきあいをお願いする機会も得た。まことに時宜を得た出会いであった。

◇

最後に、会場を変えて、忘年会兼送別会となった。見学参加者を含めて数十人が、多少窮屈な会場にすし詰め状態。知っている人より初対面同士が多いという奇妙な送別会であったが、祭を語り合い、三時間ほどの歓談は瞬く間に過ぎてしまった。

即興演奏

太鼓の群れ　アフリカ

太鼓の群れ　日本

忘年会兼送別会の会場

太鼓館　集合写真

縄文　チョーキングドラム

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

笑い仏
福島への行脚　第五回
笑い仏をお造りになった山本竜門仏師からのご寄稿

山本竜門仏師と笑い仏

わたくしは福島県を目指す「笑い仏」を造った仏師・山本竜門と申します。このたびは当プロジェクトを進める『ＭＯＮＫフォーラム』のメンバーから依頼を受け、筆をとることになりました。「笑い仏」を造るに至った経緯と福島への思いを綴らせていただきます。

◆「笑い仏」の誕生

まずみなさんにとりまして馴染みの少ない仏師についてお話ししたいと思います。仏師は仏像を作るもののことを言います。その仕事は、注文制作が中心になります。つまり、お寺さんなどの注文を受けて制作に取りかかるのです。施主からいろいろと条件を聞き、要望に合ったように作る。あくまで注文通りで、自分を出してはいけません。そうやって、仏師は代々と続いてきたのです。

仏師は師匠に弟子入りすることが多いですが、弟子になると、創作は禁じられ、師匠作か古仏の模刻のみを行うことになります。他の木彫から入門した私は、大阪・四天王寺の仁王像などを作成された大仏師・松久朋琳師（注1）に出会い、この道に進むことになります。そのときは内弟子ではなく、外弟子でした。この違いですが、内弟子ならば古来の習慣を守り、技術も高く、身分も保障される。だが変わったことをするというのはご法度。一方、外弟子は細々としたことは苦手なのですが、自由があります。いわば放し飼いの状態といいましょうか。そのため内弟子より一段下に見られるのですが…。

不思議なご縁で、私は外弟子でありながら、毎月一週間も工房に泊まり込み、内弟子と修行するという破格の待遇をいただきました。これは唯一例外の外弟子で、この生活は八年続くことになりました。「笑い仏」誕生にはこんな伏線がありました。

三〇年ほど前、外弟子の気軽さから注文ではなく、ひたすら自分の作りたい仏像を彫っていました。愛着があって、売らないから家中は仏像でいっぱい。安置場所を探そうにもお金がない。そこでＰＲと資金集めのために個展を六回開きました。一回目は地蔵菩薩、二回目は釈迦如来中心に造らせてもらいました。外弟子の身であるから、何の制約もなく、彫りたいがまま。「笑い仏」はそのときに誕生したのです。

「円空仏（注2）みたい」と拝まれたかたから言われます。高校時代から民芸に関心があり、東京の日本民芸館に通いました。柳宗悦（注3）夫人が私のために木喰仏（注4）を手にとって、見せてくれたこともありました。形式を重んじる京仏師の弟子にありながら、独創性の高い円空、木喰の精神は常に心の底にあったのです。「笑い仏」は円空調ではありますが、模刻ではなく、あくまで私の円空が宿っているのです。

この像を彫り上げて二年後の一九八五年、故郷の鳥取県倉吉市に諸像を納める「集仏庵」という工房を建て、そこに仏像を安置しました。はじめは「微笑仏」と呼んでいました。五、六年前に知人の陶芸家が壊れてしまった壺の陶片を持ってこられた。「肌がきれいで捨てがたい」と言われる。見ると、焼き締めの肌に松の薪による自然釉が見事にかかっている。そこで仏さんの後背にしようと思い立った。できあがりをみると、釉の景色が銀河のようにも見え、実にすばらしい。そこで今度は「銀河仏」と呼ぶことにした。

◆東日本大震災と仏像

二〇一一年の東日本大震災の惨状をテレビや新聞で見ると、いたたまれなくなりました。そこで「集仏庵」の仏像を送ろうと思い至りました。名古屋の知人のつてで、五〇体ばかりを被災地のかたに送り、さらに受け取ったかたが被災されたかたに手渡してくれたのです。

その中に、いわき市の女性が特に熱心に活動してくれました。たびたびこちらと連絡を取り合っていました。ある日、彼女はご主人を亡くされ、私の仏像を手にした方と二人で訪ねて来られました。妻と四人で食事をしました。倉吉のまちを歩きながらいろいろお話を聞きました。思いを共有したとはとても言えませんが、新聞やテレビを見ているだけではわからない、深い思いを感じることができました。

◆「笑い仏」へ

女性は震災後、千葉県の実家に避難されているのですが、読売新聞の記者のかたが取材に行かれたところ「いただいた仏像よりも、遠方の縁もゆかりもないかたが、私たちのことを気にかけて下さっているということがありがたい」と言っておられたそうです。

改めて考えさせられました。仏像を送ってもみなが喜んでくれるとは限りません。それでもなお送ろうとするのはなぜだろうか？あえて例えるなら、幼児が泣いている友達に自分の大好きなお菓子をあげる純粋な気持ち。国の言葉で言えば「これあげるけぇ、泣きなんないな」といったところです。

私にそれ以上のことはできそうもないし。

京都で毎年、松久一門の展覧会が行われています。震災のこの年に出展するのは、古い作ですが、「銀河仏」だと思いました。理由はこの後背です。失敗作としてたたき壊され、がれきとなるはずだった破片が、今は後背として役目を果たしている。がれきの中にも仏はおられる。あるいはがれきを背負ってくれる仏さんは、苦しみも背負ってくれているのではないか。そこで「代受苦」という名前で出展させてもらいました。

工房

いつも新聞やテレビで被災地のがれきの山を見るたびに、何とか東北にこの仏さんを届けたいと思っていました。会場などいろいろなところで話をしてみたのですが、うまく運びませんでした。今年もこれで終わりか…と思っていた昨年の十二月三〇日でした。私の提唱する「倉吉を福の神の町に」という運動（注5）で、市内の土蔵に小福神を納めに行ったときのことでした。神戸から観光に来ていたＭＯＮＫフォーラムの長谷川一家と偶然、奇跡的な出会いがあり、しばらく文通後、自然と話が進み、ＭＯＮＫフォーラムのお世話になることになったのです。名前も「笑い仏」となり、倉吉のまちを出発し、このコラムにあるように、いろいろなお寺を回り、福島を目指すことになったのです。

◆期待

七〇年以上の人生を振り返りますと、いつも大事を決定するときには必ず必要とするかたに現れていただいています。木彫の世界に引き入れてくれた焼杉彫刻の橋本親方、仏像彫刻の動機を与えてくださった高校時代の恩師・酒井先生、狭い世界から視野を広げていただいた詩人の大野新さんと中江俊夫さん、そして弟子として破格の扱いをしてくださった大仏師・松久朋琳先生も。

しかし、それだけでなく人生の分岐点ではその都度、いろいろなかたに助けられて今の私があるのだと思います。最近、老いを感じるにつけ、自分によくしてくれた人だけでなく、悪意を持っていた人のおかげでもあるのではないかと思うようになりました。

すべて丸ごと相互作用のなか、「笑い仏」が笑みをたたえながら、悠々と福島を目指していきます。それを見守りながら生きていきたいと思っております。

仏師　山本　竜門

注1　松久　朋琳（ほうりん）。一九〇一年に京都に生まれ、八七年に没。その間、彫った仏像は八〇〇〇体とも言われる。京都仏像彫刻研究所を主宰するなど、仏像彫刻の普及にも尽力した。

注2　江戸時代前期の行脚僧で、全国各地で十二万体あまりの仏像を彫った。その作風は独特で鉈を用いた素朴で荒々しい造形ながら、口元に笑みをたたえていることから、微笑仏とも言われる。

注3　柳　宗悦（むねよし）。一八八九年東京に生まれ、一九六一年に没。生活に即した民芸品に芸術的価値を見いだす「民芸運動」を提唱し、日本民芸館を設立。円空仏についての著作もあるが、木喰仏の再発見も行った。

注4　江戸時代後期の遊行僧。円空と同じく、各地で仏像を彫った。円空の野性味ある作風と比較すると、より柔和な表情の仏像が多いとされる。

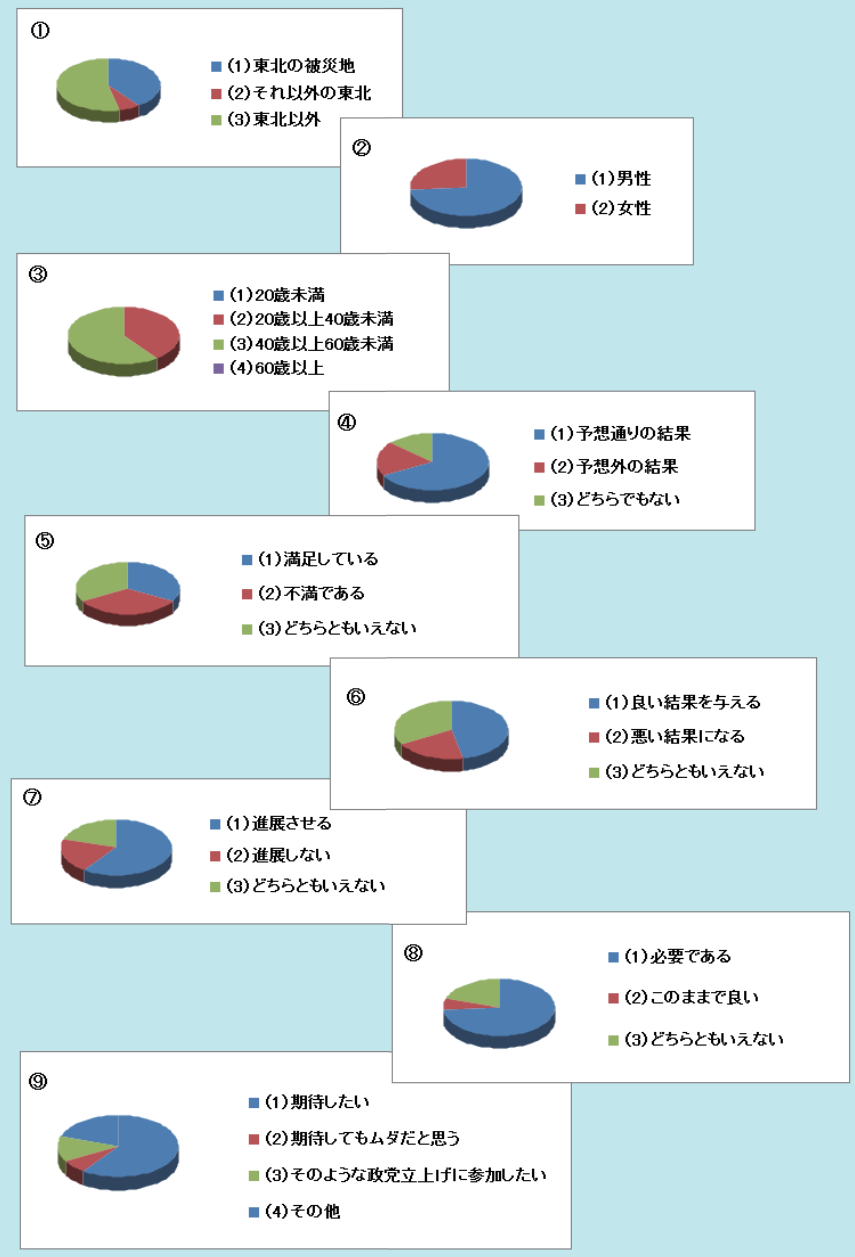
注5　山本竜門をはじめとする仏師らが、故郷の鳥取県倉吉市を盛り上げるために、まちの各所に福の神を安置し、「福の神に会えるまち」として観光に一役買っている。

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

第7号　ネットアンケート集計結果

【　衆議院議員選挙結果と東北復興の未来　】

No.	質問と選択肢	回答数
①	現在住んでいる場所	
	(1)東北の被災地	6
	(2)それ以外の東北	1
	(3)東北以外	8
②	性別	
	(1)男性	11
	(2)女性	4
③	年齢	
	(1)20歳未満	0
	(2)20歳以上40歳未満	6
	(3)40歳以上60歳未満	9
	(4)60歳以上	0
④	ご自分の選挙結果予想との比較	
	(1)予想通りの結果	10
	(2)予想外の結果	3
	(3)どちらでもない	2
⑤	選挙結果の満足度	
	(1)満足している	5
	(2)不満である	5
	(3)どちらともいえない	5
⑥	選挙結果と東北復興の関係	
	(1)良い結果を与える	7
	(2)悪い結果になる	3
	(3)どちらともいえない	5
⑦	選挙結果と東北復興の進展	
	(1)進展させる	9
	(2)進展しない	3
	(3)どちらともいえない	3
⑧	今後の政界再編	
	(1)必要である	11
	(2)このままで良い	1
	(3)どちらともいえない	3
⑨	東北復興を真剣に追求する政党の出現	
	(1)期待したい	9
	(2)期待してもムダだと思う	1
	(3)そのような政党立上げに参加したい	2
	(4)その他	3



昨年十二月に行われた衆議院議員選挙結果と東北復興の関係についてお聞きしました。（回答者数十五名）

政治に関するアンケートで、しかも結果が出たばかりの選挙についての質問のため、極力生々しさを避けることを心掛けました。

ご自分の結果予想と実際の結果との関係では、約六七％が予想通り。予想外は二〇％に留まりました。選挙結果の満足度については、満足、不満、どちらともいえないが見事に三分割。東北復興にどういう影響を与えるかについては、約四七％が良い影響がある、悪い結果になるは二〇％。東北の復興が進展するかどうかは、六〇％が進展、進展しないが二〇％。また、今回の選挙は第三極といわれる小政党が乱立しました。今後政界再編が必要かどうかについては、約七三％が必要ということで圧倒的。最後に、今後東北復興を真剣に追求する政党の出現への期待度について聞いたところ、六〇％が期待したい、そうした政党立上げに参加したいが約十三％、期待してもムダが約七％。以上のような結果となりました。

前政権に対する厳しい評価は明確だが、他方で東北復興に対する新政権への期待度も微妙な水準にあります。東北復興に真剣に取り組む政党が期待されていることは確かなようです。

編集後記

正月休みが九日間もあったので、体調復調と読書に努めた。近場の買い物以外で唯一出かけたのは大晦日と二日で、毎年恒例となったお札をもらいに穴八幡と、初詣は高幡不動と大国魂神社へ。あとは朝から夜まで読書三昧の日々。

すべての時間を費やし「ホツマツタエ」という古代文献関係資料を読み漁った。時代は縄文から弥生で、今から約四千年前から二千年前まで。どっぷりと古代に浸かることができた。おかげさまで、「古代人」から「現代人」に戻るのに大いなる努力を要する始末。

単なる楽しみのための読書ではないと言っておこう。東北復興のエネルギー掘り起こし、東北のルーツ探し、東北のプライドの原点探索という目標を掲げての古代探索であった。フォーカスはいつも「東北」にあてていた。いくつかの収穫もあった。まだ探索は終わっていないので、もうしばらく継続するが、どこかで区切りをつけて、記事にまとめていきたいと思っている。期待していただきたい。

普段はなかなか時間が取れないので、こうした読書もむずかしい。しかし、人生は短い。言い訳ばかりしていたら何もできない。次の長期休暇の読書テーマも見つけておこうと思う。

『東北独立』　砂越豊　著
価格：1,260（税込み）

時間が経過すればするほど『東北独立』という選択肢がより現実的になってくる

■新刊■　砂越　豊著　1,260円（税込）
東北独立
東北復興実現に必要なのは、特区でも、道州制でもない。東北が独立して、復興の主権を取り戻す以外に無い。そして建国・東北は大きく飛躍し、日本大改造を牽引する。
遊無有出版
〒190-0013 東京都立川市富士見町2-12-13 B1
TEL/FAX 042-512-9833
http://www.yumuyu.com/
河北新報広告掲載
2012.2.12
2012.3.13

あなたの著者制作、お手伝い致します！
電子新聞発行のお手伝いを致します！
お気軽にご相談ください。

『立ち上がれ、オジサン！』
砂越　豊　著

『もうひとつの構造改革』
砂越　豊　著

※電子新聞創刊特別値引
上記 2 冊ともに　1260 円⇒ 500 円（税込）
遊無有出版　検索

遊無有出版 YUMUYU Publishing
立川事業所 042-512-9833　本　社 042-562-3507
立川事業所 yumuyu@wj8.so-net.ne.jp　本　社 contact@yumuyu.com

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.